

## 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 令和5年度 委託業務実績報告書

プログラム名：学術知共創プログラム

研究テーマ名：人間・社会・自然の来歴と未来：「人新世」における人間性の根本を問う

実施機関：国立大学法人東海国立大学機構名古屋大学

研究代表者又は分担者氏名：中村靖子

### 1. 業務の実施日程

研究項目	4月	5月		6月	7月	8月		9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月							
① 理論 (全期間を通して、 資料収集、学会発表、 論文執筆)		テキスト マイニング 講習会	合評会		班別 会議	第3回 全体集会	合評会		国際 パネル 打ち合わせ		班別 会議			テキスト マイニング 講習会	叢書 刊行 打ち合わせ	国際 研究集会	第4回 全体集会				
② 自然と人間の 相互関係史 (全期間を通して、 文献研究、論文執筆、 学会パネル企画)																					
③ セクシュアリティの 多様性 (全期間を通して、 学会発表、調査、論文 執筆、海外の研究 協力者との共同研究)				ワー クショ ップ						班別 会議											

\* 名古屋大学と京都大学では融合的に活動を行っているため、各大学より提出する実績報告書では、研究項目、図などは通し番号とした。

### 2. 業務実績の説明

体制面では、前年度公募した人文学研究科附属人文知共創センターの助教として鄭弯弯（文化情報学）が2023年度4月1日に着任し、研究面はもとより、従前からの事務補佐と協働して運営の一端を担うこととなり、それにより、班活動や、諸々の企画を含め、プロジェクト全体がさらに円滑に遂行されるようになった。また、本プロジェクトの理論的柱の一つであるアクターネットワーク理論を担当する金信行（社会情報学）は、申請段階では学生であったため「研究協力者」として参画していたが、2023年4月より職を得、研究者番号を取得したことに伴い、あらためて「研究分担者」として参画することとなった。これにより、プロジェクトのメンバーは総勢24名となった。

プロジェクト全体の活動としては、全員参加の研究集会を2回開催したほか、各研究班の会議、グループリーダーによる打ち合わせを行い、各研究班の連携によるワークショップや講習会、国際パネル申請に向けた打ち合わせなど、諸々の企画を立案・相談・実現した。これ以外にはオンライン型連絡板をフルに活用し、プロジェクト全体で常時メンバー間の情報交換・意見交換を行っている。本年度の大きな企画としては2024年3月に、トル・ヴェルガータ大学との共催による国際研究集会（トル・ヴェルガータ大学）を二日間にわたり開催したことが挙げられる。

上記国際研究集会のあとは、政治哲学、とりわけ生政治に関する研究で高名なロベルト・エスポジト氏（ナポリ哲学研究所）を、代表者中村と第5班のメンバーらで研究訪問し、「人新世」における人間性について、また生政治についての意見交換の機会を得た。本プロジェクトに関する令和5年

度のフォローアップ報告書（令和6年1月15日付け）では「ハビトゥスやセクシュアリティの多様性については、さらに社会学者や法律学者の参加も期待される」と記されていたが、上述の通り、現時点でプロジェクトメンバーは総勢24名であり、これにRA3名が加わる。予算が極めて限られている中で、これ以上のメンバーの追加は、むしろ、当初の研究計画を縮小せざるを得なくなる状況に陥ることが懸念される。法という側面に関しては、本プロジェクトは企画の構想段階より、共同体の「法」を免疫という観点から論じ、人間性を、言語やセクシュアリティから探求したエスポジト氏の論考に深く示唆を受けており、このことは、本プロジェクトの研究班の構成にも如実に反映されている。今回、そのエスポジト氏本人と直接面会し、同氏より、本プロジェクトの目的と趣旨に大いに賛同を得たことは、本プロジェクトの目ざすところをより明確にするためにも非常に有意義であり、同氏とは、今後も継続して研究交流を重ねることを約束した。

以下、本プロジェクトの4つの研究テーマに沿って研究活動を報告する。

## ①理論

### 1-1 班を中心にした活動（第1班グループリーダー：中村靖子）

2022年11月1日に、名古屋大学大学院人文学研究科附属人文知共創センターが設立され、同人文学研究科から助教ポストがセンターにつけられたことに伴い、当年4月より、鄭弯弯が助教として着任した。鄭は文化情報学を専門とし、本プロジェクトメンバーとして正式に届けられ、理論班において活躍することになった。

理論の構築という項目に関しては理論班を中心に、1、理論班会議の開催、2、全体集会を基軸とした他班との連携と協働による情報発信、成果発信という形で研究を進めた。

**1-1-1 班会議の開催** 前年度にひきつづき、班員を中心とした会議（第2回：2023年7月1日、第3回：2023年12月27日）を開催し、各自が担当する分野での最新の研究動向を紹介し合い、それらの応用可能性について議論した。第2回会議では、本プロジェクトの理論的基軸となるアクターネットワーク理論について、社会情報学を専門とする金より『科学技術のダイナミクスをマッピングする』（1986）という文献の紹介を兼ねて「初期アクターネットワーク理論とテキスト分析」と題した報告があり、アクターネットワーク理論におけるアクターの基本的な捉え方は、テキストマイニング分析における語の捉え方と親和性が高いことなどが指摘された。続いて鈴木は「シャレーの中のLenia：資源消費に基づく成長を伴うLeniaにおける、生物と環境の相互作用」と題し、シミュレーションを用いた環境と生物の相互作用ダイナミクスの探求について、平田からは「社会学の科学認識論と社会主義」と題した報告、田村からは「熟議的な結婚」について」と題した報告があった。平田の報告では、社会学の誕生による哲学の変貌として、自由主義、反動的ナショナリズム、社会主義という三つの政治的イデオロギーの相互関係をふまえ、イデオロギー的論争を社会学として扱うマンハイムの知識社会学などを紹介した。田村の報告では、「結婚」についてのフェミニズム／ジェンダー論の見解を踏まえ、熟議民主主義論の立場から解釈された結婚としての「熟議的な結婚 deliberative marriage」の構想を提示した。大平（徹・健太）からは、共鳴と遅れという現象について、言語としての数学はリズムや集団、遅れを記述するに長けている例が紹介され、またデータ分析から得られる「関係性」は、必ずしも我々の日常的・物理的感覚とは一致しないことが紹介された。鈴木からは、Lenia生物を例に、環境と生物の相互作用ダイナミクスについて報告された。鄭からは、現代の情報処理機器の普及により、多様な分野で大量のデータが収集可能になったことで生じたデータ汚染の問題に対して、ノイズ検知の最新の手法を紹介した。また、自然言語処理における分散表現の発展がもたらす、テキスト研究の新たな可能性を示された。

会議終了後の情報交換会では、今後、理論のより深い理解を促しメンバー間でこれを共有し、各研究活動に組み込んでいく必要について話し合われた。これを受け、第3回全体集会では、当理論を専門とする研究者を招聘し、セッションを行うこととした。また、鈴木より大規模言語モデルをベースとした新しい分析モデルの紹介があり、これらを、文学研究に具体的にどう応用できるかについて議論した。早速それを成果としてまとめたのが、論文46、47、講演16、19、34であり、これらはまさしく共同研究の成果と言える。

第3回会議では、中村が、鄭によりサポートを受け、センチメント分析を用いた文学作品の分析について報告し、鄭からは、データを分析する際に有効な変数を抽出する特徴選択の新たなモデルのため、解釈性と実用性を向上させること、及び語彙の豊富さの測定に関して語彙の多様性、密度（内容語の割合）、洗練性（高度な単語）という三つの尺度を包括する新しい指標が提案された。鈴木からは、大規模言語モデルを用いて自然言語表現と行動戦略を結びつけることで、人間の行動の根底にある性格や嗜好のような、数理モデルで直接扱うことの難しい複雑で高次元な特徴をモデルに組み込むアプローチや、文化的な形質やその進化の表現に生成モデルを利用する試みについて報告された。大平健太、大平徹からは、自己フィードバックの遅れにともなう共鳴現象を表現する遅れ微分方程式が提案され、金からは、科学における知識生産のプロセスを相対化してきたSTSにおいてANTがどのような役割を果たしうるかについて話題提供がなされた。田村からは、情報化社会において、民主主義はいかなる意味で「民主主義」であり続けられるのかという問いが提起され、その可能性について議論を交わした。平田報告は、神学的な概念としての情熱(passion)に対する、科学的概念としての感情(emotion)という語の確立に注目し、感情概念と社会との相互作用的な展開を分析した。

これらの議論を踏まえ、第4回全体集会（2024年3月30-31日開催）では、これらの理論、概念、分析法が、プロジェクトメンバーらの共同研究にどのような視座をもたらしうるかについての話題提供をし、プロジェクトの今後の展望について意見を交わした。

**1-1-2 全体集会の開催** 前年度に引き続き、メンバーのほぼ全員が対面で参加（一部オンライン参加）する全体集会を2回開催した。本年度1回目、研究期間を通して第3回となる全体集会（2023年8月27-28日開催）では、本プロジェクトが理論的主軸の一つとするアクターネットワーク理論の理解をさらに深め、プロジェクトの活動に組み込んで展開させていくため、外部よりアクターネットワーク理論を専門とする研究者栗原亘氏を招聘し、「連関の社会学と共-存への問い：異種混成的な「しがらみ」をめぐる記述と実践に向けて」と題した講演のセッションを企画した。討論の部では、第2班と第5班の合同企画により、同じく外部より招聘した近藤和敬氏も参加し、社会学、哲学、政治思想にまたがる広範で活発な議論が展開した。以下、2-2-2に詳述。

第4回全体集会では、第3班の企画として、第2班、第3班のメンバーらに加え、外部からの講師を招聘し、公開セッションを開催した。これについては、以下、2-2-2と、京都大学実績報告書4-2-4、5-1にて詳述。

## 1-2 班を超えた連携活動

**1-2-1 テキストマイニング講習会の開催** 理論班は、理論的基盤の構築と並んで、さまざまな分析法の提案を担っている。第1回は、第1班の鄭弯弯をインストラクターとして、第3班、第4班と協働して第1回のテキストマイニング講習会（5月31日、京都大学）を開催した。その成果は、第3回全体集会において、2日目に「テキストマイニングのセッション」を設け、報告した。第2回講習会は、同じく鄭弯弯をインストラクターとし、第2班、第3班と合同で開催した（2024年3月7日、名古屋大学）。今回は、

プロジェクトメンバーに限定せず、メーリングリストなどを通じて周知し、半公開とした。これらの実績を踏まえ、以下、1-3-3で述べる叢書の第1巻は、テキストマイニングなど、データサイエンスと人文学の融合を目指すものとする事とした。(編集担当:鄭、国際共著)

#### 1-2-2 国際会議の開催 (2024年3月14-15日、

・トル・ヴェルガータ大学) 本プロジェクトのこれまでの学際的共同研究の活動をもっともよく示しているのが、国際会議「Anthropocene Calling: Human, Philosophy, Technology and Arts in the Age of Anthropocene」である。これは、第5班を中心として企画・準備され、イタリア側からは、トル・ヴェルガータ大学、ローマ・トレ大学、リスボン大学、ベルガモ大学などから6名の研究者が集い、二日間にわたり研究報告を行った。登壇者らの専門は、哲学、美術史学、美学・芸術学、西洋思想史、日本思想史、認知神経科学、科学哲学など、多岐にわたった。(図1、京都大学実績報告書5-1に詳述)(シンポジウム2、講演2、4、12、13、14、19)

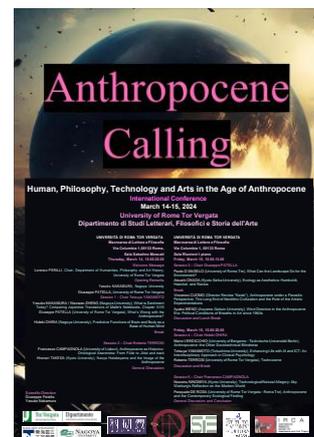


図1 ローマ国際会議

#### 1-2-3 政治学関連の強化 本プロジェクトは、かねてより、政治学など社会

科学面の強化が期待されていたが、政治学の田村、フランス社会思想史の平田、アナキズム研究の森らによる研究活動は本プロジェクトでも1つの軸をなしつつある。加えて、上記のローマ国際会議に登壇したメンバーは、会議終了後、フランス政治思想の大家ロベルト・エスポジト氏を研究訪問し、今後も研究交流を続けていく道筋をつけた(図2)。エスポジト氏の思想は、本プロジェクトの構想段階で大きな示唆を与えてくれたものであり、エスポジト氏との研究交流の道筋をつけたことは、今後の展開に大いなる飛躍をもたらすものと期待できる。帰国してからも、エスポジト氏とはメールなどでの交流を継続している。



図2 エスポジト氏の自宅でエスポジト氏を囲む中村、大平(英)、山本

#### 1-2-4 成果の発信 本プロジェクトのメンバーによる学際的共同

研究の成果として、ジャーナルや雑誌の特集へのメンバーらの寄稿、共著論文の発表、シンポジウムの開催が挙げられる。メンバーの大平(英)が企画した国際査読誌Psychologiaの特集号Predictive Mind: From Neuroscience to Humanitiesでは、メンバーらの論文の論考9本(メンバー同士の共著を含む、論文6、9、17、18、21、26、27、32、34)が掲載された(図3)。さらに、『現代思想』では感情史の特集号が生まれ、3人のメンバーが寄稿した(感情史、フランス社会思想史、ドイツ文学、論文37、47、49)(図4)。

シンポジウムとしては、上記1-2-2に記載した国際会議の他に、中村(ドイツ文学)、岩崎(インド哲学)、鄭(文化情報学)による企画として、名古屋大学文学部・人文学研究科秋季サロンにおいて、「ハイブリッド人文学 スキルとツールの共進化」(2023年10月21日、名古屋大学)を開催した(シンポジウム4)。これについては、名古屋大学文学部同窓会誌『あおぎり』においても報告・紹介された。さらに、研究協力者であるサイエンスコミュニケーター綾塚達郎の提案・企画により、名大カフェ第100回 × 高等研究院ウェビナー「いつ、どこに意識は宿る—脳神経科学に問う、われわれの正体—」において、中村と大平(英)が報告を行った(司会:綾塚、2024年1月12日、名古屋大学)(図5)。これは一般向けに公開されており、第2部は動画配信もなされている。

先述のように、名古屋大学では、本プロジェクト推進のために、人文学研究科附属人文知共創センターが設置され、これに関し、科学技術・学術審議会学術分科会人文学・社会科学特別委員会より依

頼があり、第12回同委員会において、中村が本プロジェクトの研究活動ならびにセンターの活動について報告を行った。委員たちからは本プロジェクトに対し、大いなる期待が述べられた。



図3 PSYCHOLOGIA  
特集号



図4 『現代思想』特集  
「感情史」



図5 名大カフェ × 高等  
研究院ウェビナー

プロジェクトメンバーの個々の研究業績については、本報告書末尾の詳細なリストに挙げるが、これらはメンバー間の共同研究の成果として、特記するものである。

### 1-3 展望

1-3-1 国際パネル 理論という点において、またプロジェクトを構成する5つの班の連携、統合という観点から、

本プロジェクトの成果発信として、海外でも定評のある国際学会へのパネルを企画し、申請し、受理された。具体的には、以下の2-2-2に詳しく述べるように、東西哲学会議（ハワイ大学開催、2024年5月29日、中村（代表）、岩崎（第2班グループリーダー）、立花（第2班）、和泉（第3班）、大平（英）（第5班）、ローマ国際哲学会議（岩崎（第2班グループリーダー）、立花（第2班）、和泉（第3班）、ソニア・ザン（メンバー外、人類学）、マリオ・ヴェルディッチオ（ベルガモ大学、科学哲学、2024年3月のローマ国際会議にも登壇））である。

**1-3-2 国際研究集会** 2024年3月のローマ国際会議が、非常に有益であり、また好評を得たことにより、参加者たちの誰からも自ずと第2弾が要望され提案され、支持されたため、現在具体化を進めている。2025年3月には、ベルガモ大学で開催するため、既に具体的に日時、会場を決定し、打ち合わせを重ねている。この研究集会は、「人新世」第2弾とし、日本側からは、本プロジェクトから、班を超えた参加者を予定し、海外からもほぼ同数の参加者を予定している。参加するのは、文学、思想史、言語哲学、美学・芸術学、美術史学、科学哲学、認知神経科学、臨床心理情報学、発達心理学、文化情報学など、極めて広範な分野の研究者となる予定である。

### 1-3-3 叢書刊行：全5巻、春風社刊、2024年度より、随時刊行、電子書籍も同時刊行

プロジェクト全体の成果発信として、叢書刊行を決定し、現在各巻の執筆者がほぼ決まり、執筆要項を作成した段階である。執筆者には、RAを始め、メンバー外からも若手研究者に多く寄稿してもらう企画となっている。また、分野を超えた「共著」論文や、国際共著を特徴とするものとなった。

具体的な方針は以下の通りである。

- 5巻構成とする
- 各巻の主題は、本プロジェクトの軸である5つの研究項目に基づく
- 叢書全体の監修は代表の中村が務め、各巻の編者は、5つの研究項目を担当するそれぞれの研究班のグループリーダーが務める。
- 各巻は、本プロジェクトの趣旨からして、また研究班の構成からして、おのずと班を超えて、人文・社会科学・自然科学系を問わず、分野を超えた学際的なものとなる。
- 各巻には、若手育成を目的とし、若手の研究業績を蓄積する機会とするため、RAなど、有望な若手研究者に声をかけ、これらの論考については査読制とする。
- 叢書の第1巻は、人文学のデータサイエンスとの融合をアピールするため、「テキストマイニングならびにデータサイエンスの人文学的活用の可能性」とする。（2024年度刊行予定）

- 第2巻は、2023年度が生成AI元年と呼ばれる通り、これを正面から取り組んだ論考を集める。  
(2025年度前半刊行予定)
- 第3巻は、本プロジェクトが海外の研究者との連携を強化するため、推進してきた数々の企画を踏まえ、執筆言語を英語に統一し、執筆者の半数を海外研究者とした国際共著とする。電子書籍としても発行するため、海外の研究者も容易に入手可能である。(2025年度後半刊行予定)
- 第4巻は、人間の根本に関わり、かつ、極めて社会性の高いトピックである「セクシュアリティ・ジェンダー」を主題とし、執筆者についても、ダイバーシティを考慮した布陣とする。(2026年度刊行予定)
- 第5巻は、プロジェクトを理論的に総括するものとして、プロジェクトが扱うトピックを理論的に支える論考を揃える。この巻には、先述したロベルト・エスポジト氏との研究交流の一環として、同氏の論考を翻訳の上、掲載することとなり、具体化を進めている。(2027年度刊行予定)
- 各巻は、論考以外に「コラム」を設け、若手研究者らの研究成果発表の場を提供する。

以上のように、本プロジェクトは、各班単位での共同活動を基盤にしつつ、班をまたがった共同研究の機会を積極的に作り、実践している。そもそも本プロジェクトの5つの研究班は、どの班も特定の分野に偏らず、人文系、社会学系、自然科学系が配置された構成となっている。したがって、各班の研究活動自体が既に学際的であり分野横断的なものとなるのであり、その上に、さらにトピックごとの連結により、多層的に展開していく構造となっている。既に共著論文、国際共著などの成果が出始めており、これらが土台となって、今後はさらに拡大していくことが確実視される。その一例として、鄭（第1班、文化情報学）が代表となり、中村（第1班グループリーダー、ドイツ文学、思想史）、岩崎（第2班グループリーダー、インド哲学）を共同研究者として企画したプロジェクト「連続ワークショップ：データに基づいた統計・機械学習モデルの基礎と応用」が、令和6年度名古屋大学人文科学研究科プロジェクトに採択された。このプロジェクトが企画するワークショップは、文学部・人文科学研究科の学生や教員を対象としたものであり、この活動により、広く人文学にデータサイエンスを活用する道筋をつけていくことができる。

## ②自然と人間の相互関係史

### 2-1 班を中心にした活動（第2班グループリーダー：岩崎陽一）

自然と人間の相互関係史という項目については、第2班が中心となって展開した。第2班は人間・社会・自然という三要素の相関関係を分析している。組織的研究も2年目に至り、役割分担が明確になった。伊東は自然に相関付けられる人間性を、高橋は非生物に対比される人間性を探求し、立花はその人間性を倫理的観点から、また森はそれを政治的観点から社会的な概念に展開している。岩崎はこれらの研究を統括して全体の指針を立てる役割を担うが、本年度は当初計画に従いアクターネットワーク理論（ANT）の導入を推進した。各班員の研究は順調に進展し、業績表にあるとおり成果発表も行われているが、本班の課題を達成するにはそれらをANTにより連結することが必要である。本年度は、8月の全体集会における森・近藤討論を通して、レディ・メイドなANTでは不十分な点が明らかになった。（それは主に、倫理と道徳、階級と暴力に関するものである。）それへの対応が来年度の国際学会に向けて検討されつつある。

## 2-2 班を超えた連携活動

2-2-1 第2班・第5班の共同企画 第3回全体集会における第2班と第5班の合同企画として行った森元斎（本班）と近藤和敬（ゲスト・大阪大学）の討論セッションは、本班の活動における重要なマイルストーンでもあり、事前に班別勉強会を設けてから臨んだ。討論において近藤氏は「異律」という概念を導入して主体と客体の不確定性を指摘し、そのような主体の相互行為の組織化として社会を捉える。この議論が本班の活動にとって有益だったのは、それが、ANTの有効性を示すと同時に、具体的な人間と社会を論じるうえで考慮すべき幾多の問題を浮かび上がらせたことにある。森は革命運動における暴力を論じ、上下のハイアラーキーという、ANTにおいて希薄な構造が暴力の本質に関わるものとして提示された。これらの議論を通して、第2班の研究でANTを応用する場合の問題点を明らかにすることができた。暴力の構造は、第3班の和泉の言語哲学においても鍵となる要素であり、ここでの議論は次に述べる次年度の国際学会でのパネル討論へと接続される。



図6 シンポジウム「どこまでが動物なのか」の掲載

2-2-2 成果発信 前年度に第2班を中心としたヒトと動物との関係学会第29回学術学会におけるシンポジウム「どこまでが動物なのか—人文学から考える」（企画：伊東、パネリスト：伊東、岩崎、池野、高橋、コメンテーター：南谷）が学会誌にまとめられた（図6）。

2-2-3 国際パネル 第3回全体集会での議論を受け、第2班の活動を中心に、他班の活動と連携して、次年度にふたつの国際学会でパネルセッションを申請することが決められた。ひとつは東西哲学会議（ハワイ）で、トラウマと癒しをテーマとしていることから、第1班の中村（精神分析）、第3班の和泉（他害的発言の哲学）、第5班の大平英樹（心理学）が加わる。もうひとつは世界哲学会議（ローマ）で、科学技術社会論（STS）の問題に踏み込むため、第3班の和泉と、ベルガモ大からマリオ・ヴェルディッチオ、NYからソニア・ザンが加わる。今年度はこのふたつのパネルの内容を詰めていくため、オンラインの研究会（10月5日開催）において大枠の方針を決め、引き続きSlackでの議論を継続的に行った。第4回全体集会では東西哲学会議の発表をプロジェクトメンバー全体に対してプレゼンし、フィードバックを得た。これらふたつのパネルは、哲学的応用・実践を行う場合、班割りを超えて個々のメンバーが「異律的」に相互行為を働かせることが有効であることを例証するだろう。STS的問題を扱う本プロジェクトの活動自体がSTS的研究の対象として優れている、というのがSTS研究者のソニア・ザンによる評価であった。

## 2-3 展望

令和6年度の研究はふたつの国際学会パネルを大きな軸として進行する。これまでの成果を国際的に問うことで、得られるフィードバックを期待すると共に、これを機会に海外に研究ネットワークを拡げる。また、ANTの導入に続き、本プロジェクトのもうひとつの柱であるハビトゥス論の導入を試みる。これらは、1-3-3で述べた叢書の第5巻にまとめられる予定である（編集担当：岩崎、国際共著）。



う多角的なアプローチからこの問題に取り組む。

**【研究成果の発表状況等】（責任機関（研究代表者）のみ記載）**

○論文（計 56 件）うち査読付論文 計 32 件、うち国際共著論文 計 0 件、うちオープンアクセス 計 19 件

1. Ayako Ikeno (2023). Figures of breathing in contemporary art: the artist as a bricoleur, international conference respiratory philosophy: A paradigm shift, ZRS Koper & KOIAS, Portorož,
2. Ayako Ikeno (2023). Okamoto Tarō's re-evaluation of Jōmon pottery, European Association for Japanese Studies, Ghent University.
3. Beauvieux Marie-Noëlle (2023). Critique sociale et positionnement transnational chez Ōsugi Sakae et Akutagawa Ryūnosuke : deux stratégies d'écriture polémique dans le Japon de l'ère Taishō (1912-1926), *Revue des Sciences Humaines*, pp.37–50.
4. Beauvieux Marie-Noëlle (2023). Aphorism in modern Japanese literature: Elements for a brief history of the reception of a foreign literary genre, *Literatures of the World and the Future of Comparative Literature*, pp. 7–18, [https://doi.org/10.1163/9789004547179\\_003](https://doi.org/10.1163/9789004547179_003). 査読有
5. Hiroshi Tanaka, Reiji Suzuki, and Takaya Arita (2024). Sonifying the sentiment dynamics of SNS through sentence-based analysis and sound clip mapping, *Proceedings of the 29th International Symposium on Artificial Life and Robotics (AROB 2024)*, pp. 240–245. 査読有
6. Hashikawa, Rino, Takahashi, Hideyuki, and Yanase, Yohei (2023). The unknown world of my stuffed animal: Effects of the presentation of social networks in virtual space on the social presence of stuffed animals, *Psychologia*, 65(2), pp.170–184, <https://doi.org/10.2117/psysoc.2023-B035>. 査読有
7. Kenta Ohira and Toru Ohira (2023). Delayed dynamics with transient resonating oscillations, *Journal of the Physical Society of Japan*, 92, 064002, <https://doi.org/10.7566/JPSJ.92.064002>. 査読有
8. Kenta Ohira and Toru Ohira (2023). Delay, Resonance and the Lambert W function, *Springer Proceedings in Physics*, <https://doi.org/10.48550/arXiv.2301.13448>. 掲載決定, 査読有
9. Keita Nishimoto, Reiji Suzuki and Takaya Arita (2024). Social particle swarm model for investigating the complex dynamics of social relationships, *Psychologia (Special issue: Predictive Mind: From Neuroscience to Humanities)*, 65(2), pp. 185–210, <https://doi.org/10.2117/psysoc.2023-B039>. 査読有, オープンアクセス
10. Kenta Ohira and Toru Ohira (2024). Differential equation through fourier transform, arXiv, 2401.02027, <https://doi.org/10.48550/arXiv.2401.02027>
11. Kenta Ohira and Toru Ohira (2023). Transient reviving dynamics with an exact solution for delay differential equations, arXiv, 2312.04848, <https://doi.org/10.48550/arXiv.2312.04848>
12. Kota Ishigami, Reiji Suzuki, and Takaya Arita (2024). Evolution of the sensitivity to social

- state change and the ability to modify social relationships in the social particle swarm model, Proceedings of the 29th International Symposium on Artificial Life and Robotics (AROB 2024), pp.19–23. 査読有
13. Kristine BQN, Yamamoto T, Uchiumi C, Sugaya N, and Regonia PRR (2023). Cluster analysis of coping profiles under the covid-19 pandemic, 10 World Congress of Cognitive and Behavioral Therapies, Seoul, Korea, Poster Abstracts. 査読有
  14. Naho Suzuki and Tetsuya Yamamoto (2023). The influence of interoceptive accuracy on the verbalization of emotions, Scientific Reports, 13(1), <https://doi.org/10.1038/s41598-023-49313-9>. 査読有, オープンアクセス
  15. Nagisa Sugaya, Tetsuya Yamamoto, and Chigusa Uchiumi (2024). A 2-year longitudinal study examining the change in psychosocial factors under the covid-19 pandemic in Japan, Scientific Data. 掲載決定, 査読有, オープンアクセス
  16. Naohiro Nishiyama, Reiji Suzuki, and Takaya Arita (2024). Experimental analysis of the effects of sound propagation range on co-creative communication in proximity voice chat, Proceedings of the 29th International Symposium on Artificial Life and Robotics (AROB 2024), pp.246–250. 査読有
  17. Ohira Hideki (2023). Predictive processing and emergence of the human mind, Psychologia, 65(2), pp.134–159, <https://doi.org/10.2117/psysoc.2023-B032>. 査読有, オープンアクセス
  18. Ohira Hideki (2023). Editorial for the special issue: predictive mind: From neuroscience to humanities, Psychologia, 65(2), pp.131–133, <https://doi.org/10.2117/psysoc.65.2.ed>.
  19. Reiji Suzuki and Takaya Arita (2024). An evolutionary model of personality traits related to cooperative behavior using a large language model, scientific reports, 14(5989), <https://doi.org/10.1038/s41598-024-55903-y>. 査読有, オープンアクセス
  20. Shin Nishihara and Toru Ohira (2024). The mechanism of pattern transitions between formation and dispersion, 581, 111736, <https://doi.org/10.1016/j.jtbi.2024.111736>. 査読有
  21. Shinnosuke Ikeda, Megumi Kawata, and Hideyuki Takahashi (2024). Do infants predict reward distribution to robots? Psychologia, 65(2), pp.160–169, <https://doi.org/10.2117/psysoc.2023-B033>. 査読有, オープンアクセス
  22. Shin Nishihara and Toru Ohira (2024). The turing pattern transition with the growing domain and metabolic rate effects, arXiv, 2403.05741, <https://doi.org/10.48550/arXiv.2403.05741>
  23. Toru Ohira (2024). Collective behaviors emerging from chases and escapes, Artificial Life Robotics, 29, pp.1–11. <https://doi.org/10.1007/s10015-023-00928-1>, 査読有
  24. Tsuiki Kosuke (2024). Division du sujet : Foucault/Lacan, Bruno, P. et al. En finir avec la psychanalyse ? pp.203–212.
  25. Takashi Ito (2024). The power and performativity of naming: a natural and cultural history of the mikado pheasant in early twentieth-century Taiwan and beyond, Historical Studies in the Natural Sciences, 54(2), pp.157–186, 10.1525/hsns.2024.54.2.157. 査読有, オープンアクセス
  26. Teiji Toriyama (2024). Expectation and surprise in Valéry's poetry, Psychologia, 65(2),

- pp.254–272, <https://doi.org/10.2117/psysoc.2023-B037>. 査読有, オープンアクセス
27. Tetsuya Yamamoto, Yasuko Nakamura, Hideki Ohira, and Mingzhe Jin (2024). Quantitative analysis of the characteristics and historical transition of Edogawa Rampo's works, 65(2), pp. 284–295, <https://doi.org/10.2117/psysoc.2023-B036>. 査読有, オープンアクセス
  28. Tomyta Kenta, Saito Natsuki, and Ohira Hideki (2023). The physiological basis of leader-follower roles in the dyadic alternating tapping task, *Frontiers in Psychology*, 14, <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2023.1232016>. 査読有, オープンアクセス
  29. Tomyta Kenta, Ohira Hideki, and Katahira Katahira (2023). Asymmetric error correction in the synchronization tapping task, *Timing & Time Perception*, 1, pp.1–10, doi: 10.1163/22134468-bja10090. 査読有, オープンアクセス
  30. Tomyta Kenta, Katahira Kentaro, Ohira Hideki (2023). Effects of interoceptive accuracy on timing control in the synchronization tapping task, *Frontiers in Neuroscience*, 16, 907836, <https://doi.org/10.3389/fnins.2022.907836>. 査読有, オープンアクセス
  31. Wanwan Zheng (2023). Enhancing data quality with label noise detection, *Proceedings of 10th Annual Conference on Computational Science & Computational Intelligence*. 掲載決定, 査読有
  32. Yasuko Nakamura (2024). Delay and lag in Freud's thought: From project for a scientific psychology to Moses and monotheism, *Psychologia*, 65(2), pp.311–334, <https://doi.org/10.2117/psysoc.2023-B040>. 査読有, オープンアクセス
  33. Yasuko Nakamura (2023). Berge und fiktive Landschaften in der Literatur--Der Übergang der menschlichen Mentalität gegenüber Natur, *INTERFACEing 2023 in Kobe: "Images of the Alps and "the National"*. 査読有
  34. Zineb Elhamer, Reiji Suzuki and Takaya Arita (2024). An IOT-based experimental framework for studying continuous social dynamics in a game-theoretical and face-to-face situation with human participants, *Psychologia (Special issue: Predictive Mind: From Neuroscience to Humanities)*, 65(2), pp.211–232, <https://doi.org/10.2117/psysoc.2023-B041>. 査読有, オープンアクセス
  35. 岩崎陽一 (2023). 認識論的世界と倫理的世界における衆生 (われわれ), *日本仏教学会年報*, 87, pp. 57–71.
  36. 岩崎陽一 (2023). 無言のオウム、饒舌な蛇：動物たちが喋り出す古代インドの物語世界, *ヒトと動物の関係学会誌*, 66, pp. 19–24.
  37. 伊東剛史 (2023). ひらかれた感情史のために, *現代思想*, 51(15), pp. 26–35.
  38. 池野絢子 (2024). マルゲリータ・サルファッティの芸術批評 (前編) —近代的古典性をめぐって, *パラゴネ*, 11, pp. 23–46.
  39. 大平英樹 (2023). 内受容感覚・意思決定・感情の統合-予測的処理としてのアロスタシス, *Brain and Nerve*, 75(11), pp.1197–1203, <https://doi.org/10.11477/mf.1416202505>
  40. 大平英樹 (2023). 自律神経と意思決定, *自律神経*, 60(4), pp.144–150, [https://doi.org/10.32272/ans.60.4\\_144](https://doi.org/10.32272/ans.60.4_144). 査読有, オープンアクセス
  41. 香西裕太・山本哲也 (2023). ロボットとの共食が食体験時の孤独気分を与える影響, *人間科*

- 学研究, 31, pp. 17–30. 掲載決定, オープンアクセス
42. 武田宙也 (2023). バディウの芸術論と「併走者」たち, コメット通信, 40, pp.8–9.
  43. 武田宙也 (2023). 「記号航海士」としてのアーティスト, コメット通信, 44, pp.6–7.
  44. 鳥山定嗣 (2023). 四季折々のフランス詩 (3), ふらんす, 98(6), pp.34–36.
  45. 鳥山定嗣 (2023). 四季折々のフランス詩 (8), ふらんす, 98(11), pp.30–32.
  46. 中村靖子 (2024). デジタル×文献研究, ドイツ学研究, 58, pp.16–23. 査読有
  47. 中村靖子 (2023). 感情と言葉、言葉とツール—ルケ『マルテの手記』のセンチメントを考察する, 現代思想, 51(15), pp.189–200.
  48. 平田周 (2023). 地球の再封建化とその命運, 思想, 1190, pp. 144–157.
  49. 平田周 (2023). ある「世俗的心理学のカテゴリー」が辿り着いたひとつの場所——感情資本主義と共感の領域, 現代思想, 51(15), pp. 121–135.
  50. 森元斎 (2023). 土と音楽, 情況, 2023, pp. 24–29.
  51. 森元斎 (2023). 水の思想, 現代思想, 51(14), pp. 148–150.
  52. 森元斎 (2023). Anarchism as dream : On Anarcho-pragmatism as Method in Shunsuke Tsurumi, 初期社会主義研究, 31, pp. 1–14. 査読有
  53. 森元斎 (2024). 石川三四郎における地球の思考——ヨーロッパ滞在から土民生活へ, 『国境を越える日本アナーキズム』, pp. 195–211.
  54. 山本哲也・山下裕子 (2023). バーチャルリアリティの臨床応用：仮想現実とアバターを活用したメンタルヘルスケア, 産業ストレス研究, 30(2), pp. 207–213. 掲載決定, 査読有, オープンアクセス
  55. 山下裕子・山本哲也 (2024). VRセルフカウンセリングにおける自己対話内容のテキスト分析——不安症状の改善に効果的な介入手続きの考察——, 行動科学. 掲載決定, 査読有
  56. 山本哲也・山下裕子・金井嘉宏 (2024). AIとVRが拓くメンタルヘルスケアの新時代, 行動科学. 掲載決定, 査読有

○著作物 (計3件)

1. 立花幸司 (編著) 『徳の教育と哲学—理論から実践、そして応用まで—』 (担当: 「まえがき」 (pp. 3-4) 「あとがき」 (pp. 170–171) 東洋館出版社, 2023年9月, 180頁.
2. 森元斎 (著). 『死なないための暴力論』 集英社インターナショナル, 2024年2月, 256頁.
3. 森元斎 (著). 『思想としてのアナキズム』 (担当: 「社会は転倒しなければならない——ロジャヴァ革命とCHAZによる反暴力」 (pp. 3–20)) 以文社, 2024年3月, 304頁.

○講演 (計52件) うち招待講演 計6件、うち国際学会 計21件

1. Ayako Ikeno (2023). Ripensare l'estetica futurista della macchina: l'uomo-macchina negli anni venti, Tra modernità e avanguardia: un contesto italiano III Leggere manifesti futuristi, Osaka University.
2. Ayako Ikeno (2024). Wind direction in the anthropocene era: Political conditions of breaths in art since 1960s, International Conference Anthropocene Calling: Human, Philosophy, Technology and Arts in the Age of Anthropocene, IRCA Università di Roma Tor Vergata and Humanity Center for Anthropocenic Actors and Agency, Nagoya University.

3. Ayako Ikeno (2023). *Macchina che pensa: dal futurismo all'arte contemporanea*, IRCA Lecture 2023 Università degli Studi di Roma Tor Vergata.
4. Hironari Takeda (2024). *Naoya Hatakeyama and the image of the anthropocene*, *Anthropocene Calling: Human, Philosophy, Technology and Arts in the age of Anthropocene*.
5. Kenta Ohira (2023). *Delayed dynamics with transient resonating oscillations* (Poster), 28th International Conference on Statistical Physics.
6. Kenta Ohira (2023). *Resonance with a delay differential equation*, International Conference on Industrial and Applied Mathematics.
7. Kenta Ohira (2023). *Non-equilibrium oscillatory resonance with delayed dynamics* (Poster), International Conference on "Reaction-diffusion systems: from the past to the future".
8. Kenta Ohira (2023). *Non-equilibrium oscillatory resonance with delayed dynamics*, Dynamics Days 2023 (Kagurazaka).
9. Motonao Mori (2023). *Der Mensch der Moderne und die Rojava-Alternative*, *Der Mensch der Moderne und die Rojava-Alternative*, *Der Mensch der Moderne und die Rojava-Alternative*.
10. Motonao Mori (2024). *Can we speak of humans and plants and animals symmetrically?* Whitehead, Ishimure, Graeber, American Comparative Literature Association.
11. Motonao Mori (2024). *Society must fall--About Rojava Revolution*, *Contemporary wars of aggression and language*.
12. Ninomiya Nozomu (2024). *Technological/Natural Allegory: Aby Warburg's Reflection on the Modern World*, *Anthropocene Calling Human, Philosophy, Technology and Arts in the Age of Anthropocene*.
13. Ohira Hideki (2024). *Predictive processing and emergence of human mind*, *Human, Philosophy, Technology and Arts in the Age of Anthropocene International Conference*.
14. Tetsuya Yamamoto (2023). *Enhancing life with AI and ICT: An interdisciplinary approach in clinical psychology*, *Anthropocene Calling Human, Philosophy, Technology and Arts in the Age of Anthropocene*.
15. Toru Ohira (2023). *Transient resonating oscillations induced by delay*, *Conference on Computational Physics 2023*.
16. Toru Ohira (2023). *Binary zero-correlation entanglement measurements*, 28th International Conference on Statistical Physics.
17. Toru Ohira (2023). *Delay and resonance: From differential equations to random walks*, International Conference on Industrial and Applied Mathematics.
18. Toru Ohira (2023). *Collective behaviors emerging from chases and escapes*, AROB-ISBC-SWARM2024.
19. Yasuko Nakamura and Wanwan Zheng (2024). *What is sentiment today? Comparing Japanese translations of Malte's notebooks*, Chapter XVIII, *Anthropocene Calling Human, Philosophy, Technology and Arts in the Age of Anthropocene*.
20. Yasuko Nakamura (2023). *Text Mining von literarischen Werken-- am Beispiel von Die*

Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge, JSPS Club-Treffen in Japan.

21. Yamada Nodoka, Sakaguchi Kikue, Nakamura Yu, Miyazaki Kazuteru, Yamaguchi Shu (2024). Competencies to be cultivated in higher education and their evaluation in the era of Generative AI: Through the experiences with Self-Study Degree-Awarding Program in NIAD-QE, The 15th Higher Education International Conference.
22. 伊東剛史 (2023). 劇場的空間としての動物園：アニマル・ヒストリーの課題と可能性, シェイクスピア学会.
23. 和泉悠・谷中瞳・永守伸年・荒井ひろみ (2024). ホープスピーチ研究のための日本語データセット, 言語処理学会第 30 回年次大会発表論文集, pp.1876-1881. オープンアクセス
24. 大平徹 (2023). ゼロ相関による量子シュミット階数同定, 日本物理学会年次大会.
25. 大平徹 (2024). 遅れ力学と共鳴, 時間遅れ系に関する研究集会.
26. 大平徹 (2024). 遅れ、追跡と逃避 –そして量子基礎論, 計算統計物理学の今日と明日.
27. 大道麻由, 高橋英之, 伴碧, 飯尾尊優, 築瀬洋平, 石黒浩 (2024). 物語を生きるロボット~ 対話と大規模言語モデルを用いたロボットのバックストーリーの生成~, 研究報告ヒューマンコンピュータインタラクション (HCD), 41, pp.1-6.
28. 大道麻由, 高橋英之, 伴碧, 石黒浩, 橘亮輔, 築瀬洋平 (2023). 頑張るロボットとの交流が引き起こす無意識的態度変容-応援行動の計測からの予備的検討, 研究報告ヒューマンコンピュータインタラクション (HCI), pp. 1-7.
29. 加藤樹里・李楊・山本哲也・大平英樹 (2023). 感動や畏敬感情が罰の評価に及ぼす影響, 日本社会心理学会第 64 回大会論文集.
30. 酒井隆史・森元斎 (2023). 「当たり前」をグラつかせる グレーバー&ウエングロウ『万物の黎明』, 図書新聞, 3236, pp.1.
31. 鈴木麗璽, 浅野誉子, 有田隆也 (2024). 大規模言語モデルを用いたエージェントベース進化モデルにおける形質表現の拡張, 言語処理学会第 30 回年次大会発表論文集, pp.1931-1935. オープンアクセス
32. 鈴木麗璽, 有田隆也 (2023). 大規模言語モデルを用いた協力行動に関する性格特性の進化モデル, 第 8 回人工生命研究会資料, pp.1-8.
33. 鈴木菜穂・山本哲也 (2023). ロボットからの Affective touch が悩み開示時の感情語使用と気分状態の変化に与える影響, 日本心理学会第 87 回大会発表論文集.
34. 鈴木菜穂・山本哲也 (2023). 自他の感情を推定・言語化する際における内受容感覚知覚の影響, 日本認知・行動療法学会第 49 回大会発表論文集.
35. 多和田真太郎・坂口菊恵・齋藤慈子 (2024). 性別違和者における感覚および認知の特異性, 性同一性障害 (GID) 学会 第 25 回研究大会.
36. 中村靖子 (2024). 意識と無意識の哲学的関係, 名大カフェ第 100 回 × 高等研究院ウェビナー「いつ、どこに意識は宿る—脳神経科学に問う、われわれの正体—」. 招待講演
37. 中村靖子 (2023). ハイブリッド人文学 スキルとツールの共進化, 名古屋大学文学部・人文学研究科秋季サロン 2023.
38. 中村靖子 (2023). デジタル×文献研究, 第 39 回ドイツ学会シンポジウム「デジタル×ドイツ研究」.
39. 中村靖子 (2024). 人文知共創を目指すために, 科学技術・学術審議会学術分科会人文学・社会

科学特別委員会.

40. 鄭弯弯 (2023). ノイズに悩まされないで:シャドウデータに基づくラベルノイズ検出方法, 第22回情報科学技術フォーラム.
41. 鄭弯弯 (2023). センチメントによる景気動向指数 DI の補正と解釈, 第20回テキストアナリティクス・シンポジウム.
42. 鄭弯弯 (2023). 語彙サイズが大きいのは豊富であるか, 2023年語彙研究会大会.
43. 鄭弯弯 (2024). 語彙の多様性, 密度, 洗練性から見た語彙の豊富さ, 言語処理学会第30回年次大会.
44. 鄭弯弯 (2024). F-LUKE: 景気センチメントに特化した言語モデル, 情報処理学会第86回全国大会.
45. 平井玄・栗原康・森元斎 (2023). 放射能バカヤロー! ——新宿御苑への放射能汚染土持ち込みに反対する トークイベント「放射能バカヤロー!」, 図書新聞, 3586, pp.1-2.
46. ボーヴィウ・マリ=ノエル (2023). アフォリズムと通念, アフォリズムと通念国際シンポジウム.
47. ボーヴィウ・マリ=ノエル (2023). 簡潔さのレトリックと女性差別, 17世紀~21世紀のフランス文学におけるジェンダーと性.
48. 眞島凌・山本哲也・石川信一 (2023). 精神疾患に対して子どもが有するパブリックスティグマ低減プログラムの効果 -小中学生を対象としたシステムティックレビュー-, 日本認知・行動療法学会第49回大会発表論文集.
49. 宮澤和貴・長井隆行 (2024). 大規模言語モデルによるマルチモーダル情報統合に関する考察, 第41回日本ロボット学会学術講演会.
50. 南谷奉良 (2023). 声をもつテキストの誕生—生成 AI と文学研究, 京都大学文学研究科公開シンポジウム「未だ生成されざる学知を求めて—生成 AI の可能性と諸問題」.
51. 森元斎・ブレイディみかこ (2024). 「暴力はいけません」と決めつけることに潜む“暴力性”を考える。「人口の3.5%が非暴力的な運動で立ち上がれば世の中は変わる」の欺瞞〈森元斎×ブレイディみかこ〉, 集英社オンライン.
52. 森元斎・ブレイディみかこ (2024). 「極右」でも「極左」でもない「極・中道」。ヨーロッパで大きな問題となっている政治的潮流「エキストリーム・センター」の実態〈森元斎×ブレイディみかこ〉, 集英社オンライン.

○本事業で主催したシンポジウム等 (計8件) うち国際研究集会 計1件

1. 特別企画セッション「生成AIと主体化するノンヒューマン—人間のようなものと感情のようなもの—」, 第4回全体集会, 名古屋大学, 2024年3月20日.
2. Anthropocene Calling Human, Philosophy, Technology and Arts in the Age of Anthropocene, University of Rome Tor Vergata, 2024年3月14-15日.
3. テキストマイニング講習会, 名古屋大学, 2024年3月7日.
4. ハイブリッド人文学—スキルとツールの共進化—, 2023年度文学部・人文学研究科秋季サロン, 名古屋大学東山キャンパス, 2023年10月21日.
5. 「17世紀~21世紀のフランス文学におけるジェンダーと性」, 第4班のワークショップ, 京都大学, 2023年5月26日.

6. 「第3班第4班合同セッション」, 第3回研究集会, 名古屋大学, 2023年8月27日.
7. 「第2班第5班合同企画」, 第3回研究集会, 名古屋大学, 2023年8月28日.
8. テキストマイニング講習会, 京都大学, 2023年5月31日.

○ホームページ <https://a3hsn.org/>

## 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 令和5年度 委託業務実績報告書

プログラム名：学術知共創プログラム

研究テーマ名：人間・社会・自然の来歴と未来：「人新世」における人間性の根本を問う

実施機関：国立大学法人京都大学

研究代表者又は分担者氏名：南谷奉良

### 1. 業務の実施日程

研究項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月					
④言語獲得と主体化プロセス (全期間を通して： 資料収集、実験準備・実施、論文執筆)	読書会	テキストマイニング講習会		読書会 班別会議	第3回全体集会 合評会	特別企画ロボット視察	国際パネル打ち合わせ	読書会	シンポジウム共催		班別会議	読書会	全体集会	テキストマイニング講習会	叢書刊行打ち合わせ	国際研究会	第4回全体集会／公開特別企画セッション
⑤生政治とアート (全期間を通して： 理論研究、実験研究、芸術研究)																	

\* 名古屋大学と京都大学では融合的に活動を行っているため、各大学より提出する実績報告書では、研究項目、図などは通し番号とした。

### 2. 業務実績の説明

#### ④ 言語獲得と主体化プロセス

##### 4-1 班を中心にした活動(第3班グループリーダー:南谷奉良)

4-1-1 班別会議ならびに特別会議 言語獲得と主体化プロセスという項目については、第3班が中心となって展開した。第3班は、各班員は資料収集、実験準備・実施、論文執筆・投稿、国内／国際学会発表を行いながら、各自の専門領域を班員に共有すると同時に、専門外の知見を自身の研究に導入することに努めた。例えば年2回の班別会議（2023/7/31、2024/2/21）の他には、2024年4月から正式に第3班の班員となった宮澤和貴が主催者となって第3班特別会議「ロボット視察（@大阪大学長井研究室）」（2023/9/18）を行い、個人の主体化における脆弱性の意義の追求、ロボットの言語獲得モデル、ChatGPTを用いた研究内容が班員に共有された。業績発信という点では、池田の論文が査読付き国際誌に採択され、和泉が翌年度に、2つの国際会議に登壇することが決定した点でも、順調な進捗を見せている。

4-1-2 公開オンラインイベント読書会の開催 2023年度には、専門知の社会還元を図る目的で本プロジェクトの共催企画で南谷が主催しているAIを活用した公開オンラインイベント「終わらない読書会—22世紀の人文学に向けて」を計5回開催したが（2023/4/21、7/28、9/29、11/24、2024/3/15）、

若手研究者ネットワークを拡大する上で大きな意義があった。例えば生成AIの応用可能性と諸問題についてフォローアップしていくため、「孤独とロボット」の問題を研究しているソニア・ザン（大阪大学人類学部招聘研究員）に、関連ニュースのリスト化と年表化を進めてもらっており、そのリストを読書会の第一部で使用することができている。第5回読書会ではイングロやマキューアン、ウェルベックの小説を扱い、AIロボットやセックスロボット、クローンの社会問題を取り上げ、ツアラを扱った第6回では生成AIによる作詩の可能性を議論した。また若手研究者の登用という点では、第2回の講師を務めたイングロを専門とする肖軼群（京都大学博士後期課程）が、現在進めている叢書執筆に参加することになった。第7回では、イングロの『クララとお日様』を再読し、宮澤が講師を務め、コメンテーターにはロボットと感情モデル及び感情分化の研究を行っている日永田智絵（奈良先端科学技術大学院大学）が登壇した。文学研究者ではなくロボット研究者がロボット小説を読解するという本プロジェクトにとって本質的なコンセプトである文理横断的な試みを行った。オンライン読書会という開催形式は人文学の伝統と方法論にもとづいて専門知を共有できる上で利点が多く、実際に読書会の登録者数が300名を超えた点も大きな成果の一つであった。

## 4-2 班を超えた連携活動

**4-2-1 テキストマイニング講習会の開催** 2023年5月31日には鄭穹穹を講師として、第4班グループリーダー鳥山定嗣と3班の南谷・和泉が中心となって、テキストマイニング講習会を開催し、テキスト整形にはじまり、特徴的な語彙を視覚化するワードクラウド、語彙の豊富さ、主成分分析の方法を習得し、各自の研究課題内容を共有した。同講習会では、和泉・鳥山・南谷の研究において、ジェンダーやセクシュアリティ、悪口及び代名詞を含めた「他者の呼称」の問題が共通点として顕在化した。第2回の講習会は、2024年3月7日に名古屋大学で開催し、南谷も参加した。（名古屋大学実績報告書1-2-1にも記載、本研究項目に特化した観点よりここに記載）

**4-2-2 合評会の開催** 上記を受けて、8月16日には、第3・4班合同企画として『悪口ってなんだろう』（和泉悠著、2023年）の合評会を開催した。ここでは、和泉が提唱する「ランキング／劣位化説」をもとに、セクシュアリティとジェンダーに関連した悪口、マイクロアグレッションや自虐の問題からドーパミン回路と悪口の依存性まで、幅広い議題に関して議論を行った。この「悪口」に関連する形で宮澤と池田がそれぞれ進めている「ポジティブ／ネガティブなプロンプトによるChatGPTへの影響」及び「ChatGPTがヒトの意思決定」の研究内容が契機となり、全体研究集会（2023/8/27-28開催）で南谷が行った発表「登場人物の呼称と「悪態」からみる『クララとお日さま』——テキストマイニングとChatGPTによる応用的読解」に結実した。（名古屋大学実績報告書3-2-1、本研究項目の点に特化した観点よりここに記載）

**4-2-3 シンポジウム企画** 2023年12月10日には、南谷が京都大学文学部の公開シンポジウムで「生成AIの可能性と諸問題——未だ生成されざる学知へ向けて」のオーガナイザーとなり、第5班の山本哲也を招聘した（図9）。全体では英文学、科学技術史、認知神経科学・臨床心理学、地理学、文化越境研究における生成AIの実践を通して、この新興技術の学術的応用を学際的に検討した。山本による「生成AIによるメンタルヘルスケア」の可能性及びChatGPTによるポジティブな反応を返す対話型エージェントの研究は、第3班の和泉、宮澤、池田と関連する分野でもあり、このシンポジウムをもって新たな接点が生まれたと言える。



図9 公開シンポジウムで「生成AIの可能性と諸問題——未だ生成されざる学知へ向けて」

**4-2-4 公開セッションの企画** 上述したオンライン読書会の第7回で登壇した日永田には、第4回全体集会（2024/3/30-31）のセッション2「生成AIと主体化するノンヒューマン——人間のようなものと感情のようなもの」で研究発表を依頼した。同セッション内では、ヒューマンエージェントインタラクションを専門とする高橋英之（第2班）がロボットと物語を主題として報告をし、「感情の歴史学」を専門とする伊東剛史（第2班）がコメンテーターを務めたことで、生成AIとロボット、痛み・悪口、感情に関する研究が、班を越えて、また文理の境界を越えてリンクする機会となった。

### 4-3 展望

上記のように、**言語獲得と主体化プロセス**という項目に関しても、第3班を中心として研究活動は極めて順調に進んでいる。実際、ロボット、生成AI、痛みと可傷性、悪口やネガティブな発言、感情や情動、主体化と言語獲得といった研究モチーフを通じて、研究者ネットワークを広げながら、人文科学と自然科学の専門知を研究者と社会のなかで共有する成果と方法論を生み出すことができている。特に新興技術である生成AIは学問的な課題が山積しており、単一のディシプリンやルールによって研究と運用が支配的にならない「柔らかな均衡」を実現していく上で、今後も重要な研究課題になる。これらの成果は、名古屋大学実績報告書の1-3-3に記載したとおり、本プロジェクトが企画する叢書の第2巻としてまとめ、2025年度前半に刊行予定である（編集担当：南谷）。

## ⑤生政治とアート

### 5-1 班を中心にした活動(第5班グループリーダー: 武田宙也)

生政治とアートという項目については、第5班が中心となって活動を展開しており、本年度も、理論研究・実験研究・芸術研究を中心に活発に研究を進めた。以下では、それぞれの項目ごとに概要を記述する。

#### 5-1-1 理論研究

本項目の理論研究に関しては、古典的な生政治論を踏まえつつ、本研究全体のテーマに合わせた応用可能性を探った（非人間的なものの生政治論の文脈への位置づけなど）。従来、フーコーの生政治論において統治の対象として考慮されているのは人間のみであると考えられ、「新しい唯物論」等の議論においては、こうした点がフーコーの限界（「人間中心主義を超えられていない」）として指摘されることが多かった。一方で近年、フーコー論・生政治論の分野で、フーコーの生政治論にひそむ「人間以上のもの」へのまなざしに注目する研究がいくつか見られるようになってきた。このうち、本年度はとくにCary Wolfe、Kristin Asdal、Thomas Lemkeの議論について検討を行った。

#### 5-1-2 実験研究

生政治概念に基づいた実験研究を進めた。具体的には、身体内部の知覚として定義されてきた内受容感覚を、脳と身体の間方向的なモニタリングと制御のメカニズムであると再定義し、そこから得られる示唆を検討した。また、VRやAI、ロボティクスといった技術が、生政治的状况において有する意味について検討し、おもに臨床心理学の観点からその可能性と限界の検証を試みた。

#### 5-1-3 芸術研究

芸術研究に関しては、日本の現代美術家、三上晴子の鍵概念である「被膜」について検討した。これは人間を守ると同時に危険な物質を閉じ込めておく機能を果たす薄い膜のことである。人類は生きていくためにさまざまな人工被膜を必要とする。三上の被膜モデルは、ペーター・スローターダイクの言う「泡」（近代において個人や共同体が作り出した、自らを他者から隔離する空間）に似てお

り、大気と環境をめぐるポリティクスを再考するうえでクリティカルなものとなる。また、畠山直哉の写真作品の研究を通じて、人新世のイメージについて検討した。畠山は、さまざまな自然や人工物が織りなす壮大な光景をパノラミックに捉えた写真で知られる写真家である。畠山には、自然と人間、あるいは自然と技術のあいだに区別を設けず、両者をフラットに見る視点があり、彼の芸術にもそれがあらわれている。本研究では、畠山の作品を通じて、人新世における自然と人間の関係が、いかに芸術的に表現されうるのかを探った。

## 5-2 班を超えた連携活動

**5-2-1 第2班・第5班の合同企画** 第3回全体集会の2日目（8月28日）に、第2班と第5班の合同企画として自然哲学の再考をテーマとしたセッションを行った。第5班の武田が司会を務め、『人類史の哲学』を刊行予定の近藤和敬（大阪大学）をゲストに迎え第2班の森とともに発表を行った。近藤の発表は、自律と他律という二項対立を調停するものとして、自他未分の「異律」という新たな概念を提唱し、この異律の原理を検討するものであった。また森の発表は、自然認識と実在をめぐるかわされたデヴィッド・グレーバーとエドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロの論争を再考するものであった。両氏の発表後には、本プロジェクトの理論的支柱となるANT理論ともかかわる二つの発表をめぐる活発な質疑がかわされた。（名古屋大学実績報告書2-2-1）

**5-2-2 第3班特別会議への参加、第3班グループリーダー企画のシンポジウムへの登壇** 山本は、2023年9月18日に大阪大学で行われた第3班の班別会議（大阪大学長井研究室のロボット研究環境の視察）に参加し、ChatGPTを用いた研究について発表を行った（本報告書4-4-1）。これらの活動を受けて、第3班の南谷がオーガナイザーとなり2023年12月10日に行われたシンポジウム（「生成AIの可能性と諸問題—未だ生成されざる学知へ向けて」）にも山本が参加し、「生成AIによるメンタルヘルスケア」の可能性及びChatGPTによるポジティブな反応を返す対話型エージェントの研究について発表を行った。（本報告書4-2-3）

**5-2-3 成果発信** 本年度の成果で特筆すべきものとしては、2024年3月14日から15日にかけて、イタリアのローマ大学トル・ヴェルガータ校にて開催した国際会議「Anthropocene Calling: Human, Philosophy, Technology and Arts in the Age of Anthropocene」が挙げられる（シンポジウム2、講演2、4、12、13、18）。本シンポジウムは、タイトル通り、「人新世」という巨大な問題系を多面的な観点から検討する場として設けられ、議論の俎上に載せられた主題は自然、技術、言語文化、芸術と多岐にわたった。日本からは第5班のメンバーに加えて代表の中村、それから京都大学名誉教授の岡田温司が、イタリアからはローマ大学トル・ヴェルガータ校を中心とする研究者たちが参加した。2日にわたったシンポジウムは両日とも聴講者に恵まれ、非常に活発な質疑がかわされた。（名古屋大学実績報告書1-2-2、図1）

上記国際シンポジウムとは別に、今回のイタリア訪問では、イタリア出身の世界的哲学者ロベルト・エスポジトとの会談も実現した。第5班の主要トピックである「生政治」は、彼の仕事が着想源の一つになっている。われわれは、かつて彼が所長を務めていた「イタリア哲学研究所」を訪れた後、エスポジトの自宅に招かれ会談を行い、今後も研究協力を継続していくことを確認した。（名古屋大学実績報告書1-2-3、図2）

本国際会議では、第5班のRAである二宮も研究報告を行い、その後のエスポジト訪問にも参加し、一連の企画は若手研究者の海外における活躍の場としても大いに有意義であった。（講演12）

### 5-3 展望

上記のように、「生政治とアート」という項目に関しても、第5班を中心として、本年度も精力的に研究活動を行い、大規模な国際シンポジウムをはじめとする成果を生み出してきた。また、第2班とともに自然概念の検討を行ったり、第3班とともにロボットやAIの可能性を考えたりという形で、班を超えた活動にも意欲的に取り組んだ。これらの学際的共同研究の成果は、名古屋大学実績報告書1-3-3に記載した通り、本プロジェクトが刊行する叢書の第3巻として刊行予定である（編集担当：武田、執筆言語：英語、国際共著、2025年度刊行）。